やわらかい生活（映画）を通して

蒲田の雑多さは心地い～ってこと？

米川　雅子

映画『やわらかい生活』〝それとな～く幸せ〟は、二〇〇六年六月十日（土）より、松竹・渋谷シネ・アミューズ、新宿K’scinema、キネカ大森、他にて上映された映画である。

監督は廣木隆一、脚本は荒井晴彦、『ヴァイブレータ』で映画界に衝撃を与えたコンビが再び挑んだ映画として注目を浴びる。

原作は、絲山秋子の『イッツ・オンリー・トーク』（文藝春秋刊）、当時、デビュー作にして第九六回文學界新人賞を受賞した作品である。他、『袋小路の男』で川端賞、『沖で待つ』で芥川賞受賞。新しい、リアルな女性像を描き、注目を浴びた作家だ。

音楽は、Dragon Ashの古谷建志、俳優の武田真治、上杉俊祐、吉川寛のユニットnidoである。

主人公『橘優子』を演じた主演の寺島しのぶは、孤独を受け入れ、自然体で生きている新しい女性像を見事に演じ、多くの女性たちから〝優子は私！〟と共感を集める。

また、共演の豊川悦司は、優子のいとこ『橘祥一』を演じ、「チャーミングなダメ男ぶりが魅力的」「一歩引いたところから優子を温かい目でみている姿がとてもよかった」〝こんな男にそばにいてほしい〟と、女性ファンの熱い支持を受ける。

他にも、妻夫木聡（気の弱いチンピラ）、田口トモロヲ（趣味のいい痴漢）、大森南朋（大学の同級生）、松岡俊介（大田区長を目指すマザコンでＥＤの都議会議員）、柄本明（優子のおじ、祥一の父）、いわぶちかつひこ（ストリートミュージシャン）という顔ぶれとその役柄からも「どこか欠けていて、何かを諦めて、それでも何かにしがみついて生きていかなければならない人間たち。彼らを通して、『生きていくこと』を愛しく、切なく、コミカルに描かれ、みな心のどこかに〝優子〟は存在し、〝いま〟を生きる女性すべてが必見の映画」（公式パンフレットより）なのである。

さて、物語は、「橘優子、三五歳、独身、一人暮らし。一流大卒、一流企業の総合職、バリバリのキャリアウーマン・・・だった。しかし、不幸は突然やって来る。仕事も、男も、全てを失った。人生はどん底のまま、蒲田に引っ越してきた。ＷＥＢサイト「Love KAMATA」を立ち上げる。福岡からいとこの祥一が優子のアパートに、無一文で転がり込んできた。優子のもとに、議員、痴漢、チンピラらが

ゆるゆると集まってくるようになっていた。みんな孤独だけれど、やわらかな時間が互いの心の隙間を埋めていく…。」（パンフレットより抜粋）のであるが、その舞台となった蒲田や大田区内での撮影は、二〇〇五年十一月九日～十二月五日に行われている。※主な撮影場所（公式パンフレット「蒲田MAP」参照）

東急プラザ蒲田の屋上にある観覧車、蒲田の黒湯、銭湯の煙突、タイヤ公園、商店街のアーケード・・・特にアーケード内に作られたセットの屋台に顔なじみのメンバーがエキストラとして座っている。地元ネタとして大いに盛り上がりそうな場面、映画でありながら、なんともリアルなオヤジの街・蒲田だ。

しかし、なぜ、女性が主人公である映画の舞台が蒲田なのだろうか・・・。

物語の初めに蒲田を語るにドキューンとくる優子のセリフがある。それは、「蒲田は、粋がない下町、だからなんだな、きっと。初めて来たときから、どこか懐かしくて、夢で歩いたことがあるみたいにしっくりきた。」（パンフレットより抜粋）である。

さらに廣木監督が語っていることに注目する。「仕事に、家庭に、子供に、それを全部やることは本当に大変。男よりも女のハードボイルドは半端じゃない。孤独で、強い。女の幸せって何？って、がんばっている女の子へのエールというか、応援したい。あまりひとりでがんばって欲しくないけど。楽に生きようよ、って。がんばらないでいいよ、って。がんばっている女の子へのエールをおくりたい。」（公式パンフレットより抜粋）である。

映画が上映された頃の日本は、経済構造が大きく変化し、女性の社会への関わり方も変わりつつあった。上映から十数年経っているが、今ほど多様な価値観も受け入れられておらず結果、選択肢は限られ、世間体やら普通という概念や枠なるものがはっきり存在していた。

ちょうどその頃、一人で行動する女性『おひとりさま』が現れる。飲食店に行くと店員さんとのやり取り「何名様ですか？」「おひとりさまですね。」のアレだ。なぜ、女性かというと大抵、女性は「私も、私も！」と群れで動く(笑)。ましてや女性が一人でいる光景は、女性があるべき姿という一般的概念から外れた孤独で可愛そうな人とみるステレオタイプで括られた。しかし、『おひとりさま』には、これまでの概念と違った定義があったように記憶している。経済的にも精神的にも自立している女性、個としての確立はもちろん、自他共生のための知恵であり、生き方の哲学であり、独自のスタイルであること。さらには、誰かと一緒の時間もひとりの時間も同じように楽しむこと等・・・そうなると、『おひとりさま』にとっては、気合いを入れて自分を着飾らず、群れで動く煩わしさもなく、ひとりでまちを歩いたり、旅に出たり、お酒を飲んだり、

ありのままでいられる粋がない下町は都合がいい。さらに、ひとりになることで自分を見失わず自分らしさを保つことができるまちともなれば、廣木監督が語っているとおり、「舞台となった蒲田は、猥雑（ワイザツ）で、何かすごく面白い街。東急と京急とＪＲの３つの駅があって、それぞれに商店街があって、一貫性というのがない。横丁を曲がるとすぐに全然違う雰囲気になったりするところに惹かれた。…温かい街の雰囲気も味わい深い。時代遅れのデパート屋上の観覧車、商店街の居酒屋、池上本門寺、六郷土手、銭湯…。心の傷を癒すには最適な街。」（パンフレットより抜粋）なのだ。

確かに、蒲田は、何もかもが混在している感は半端ない。両極端なことも、矛盾することも、ありのまま理屈なく受け入れているかのようだ。これには、一瞬、戸惑うが存在を否定しない故の雑多さだと考えれば、蒲田の寛容さともみて取れる。そして、雑多さ故の、付かず離れずの距離感に温かささえ感じる。商店街との連携イベントにおいても決して否定されることはないが、自ら動かない限り放っても置かれる。しかし、無関心な訳ではない。まるで、幼い頃、秘密基地をつくる子どもたちと大人たちの関係に似ている。大人たちは、子どもたちの冒険心を壊すことなく見て見ぬふりをしながらもしっかりと見守っている。「どこか懐かしい感じがする」という優子のセリフや「心を癒すのに最適な街」と語る廣木監督の言葉からも、蒲田の雑多さに心地よさを感じるのもまちと人との距離感にあるのかもしれない。

さらに興味深いのは、「こういう時代に生きていれば、誰しもが起こりうる。いまここに生きている「時代性」を描きたい。」（公式パンフレットより抜粋）と、廣木監督が語っていることである。

駅ビルがリニューアルしようが、駅前広場が景観整備されようが、駅に降り立って街に出た時の空気感は面白いほどに変わらず蒲田だ。人間もきっと、自分を見失うことなく、ありのままの自分でいられたらどんなに楽だろう・・・

そう思った時、映画「やわらかい生活」主人公、優子が蒲田の銭湯の黒湯に浸かり放ったセリフ「それとな～く幸せ」から粋のない下町・蒲田のやわらかさに触れた気がした。

最後に、今でも思い出すと笑ってしまうエピソード。

招かれた試写会後のこと。一緒に観た方々と帰りに渋谷で食事をしたのだが、着席するなり「さっぱりわからない映画だった。」・・・でしょうね。

そう、これこそおひとりさまで観る映画です。

もちろん、お食事は、粋のない下町・蒲田がおすすめです。

【参考資料】

映画「やわらかい生活」公式パンフレット

【写真】

グラスフォレスト主催

「江戸切子工場オープンデー」体験の様子

※昨今、町工場ツアーやものづくり体験に参加する女性が増えている。

【公式パンフレットより　※主な撮影場所】